

兵十が、赤いどの所で麦をといでいました。

→

「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」

この時間は、ひとりぼっちになった兵十を、ごんがどんな思いで見つめているかをさぐることがねらいである。ひとりぼっちになった兵十への同情、共感、そのうらには、ごん自身の孤独さがある。同じひとりぼっちどうしの共感、それまでの単なるいたずら相手という意識から、互いにわかりあえる仲間のような意識へと転換していく。そこを読ませたいと思った。

T 3章の初めのところを見てください。「兵十が赤いどの所で麦をといでいました。」で、その姿を「おれと同じひとりぼっちの兵十か。」で見ている。このごんの気持ちをみんなでていねいに考えてみたいと思います。

まず、初めにゆっくり読んでもらいます。西津君

西津 朗読

T もういちど、自分自分で読んで、ここでどんな兵十がうかぶか。それをどんな気持ちで見ているか、て考えながらゆっくり読んでください。

C (読む)

T はい、じゃ、最初にね、「兵十が……」ここで、みんなは、どんな兵十がうかんできますか。……赤いさつまいもみたいな元気のいい兵十がうかんでくるかな……。

龍法 さびしそう。

祐子 さびしいくらしをしていたときより、今のほうがもつとさみしそくて、兵十はためいきが出そう。

T ほう。前よりもつとさみしくて、ためいきがでる。

哲也 一人になったからいそがしくなる。

T 仕事がいそがしくなる。今までおつかあがしていたことまでしんならん。

朝子 まずしかった時よりもつとさびしかった。

T ここまで(死ぬ)よりも、もつとさびしくなった。

宣彦 兵十のおつかあがしんで、おつかあの方までしんならんからいそがしい。

T おつかと、兵十といっしょにいたのが、おつかあがいなくなつてで、このとき、それを見ているごんには、その姿がどんなに見えたかもう少し、ごんの目で見てみましょうか。  
ごんは、この姿を見ながら、「おれと同じひとりぼっちの兵十か。」  
て言ってますね。この言葉の中に、ごんの、どんな心、気持ちを読めますか。

宣彦 ごんもひとりだし、兵十のおつかあがしんでから、同じひとりぼっち。

T 兵十とおんなじだなんて。

勝仁 あんな、ごんはひとりぼっちだからかわいそうやなんて。

T かわいそうだなって見ている。

哲也 なんか、しょんぼりしてみる。

T だれが？

哲也 くんが。

直也 はい、哲ちゃんと似てる！

T これを見ているくんもしょんぼり。……みんなはどうですか？そんな気がする？ どうしてかな。

直也 あんな、くんは、自分の親がいなかったことに気が付いてな、悲しみがこみあげてきた。

T この姿を見ていたら、くんも、悲しみがこみあげてきた。

直也 親がないでな。

T 今、哲也や直也が言うてること、もうちよつと言える、という人ない？

優子 くんは、親が死んでひとりぼっちになったさみしさを知っているから、くんまで、さみしい。

智将 くんは、いたずらをして、そのさびしさをまぎらしていたけど、今、兵十を見ると、さびしそうにしているから、そのさびしさがこみあげてくる。

T わかる。……くんもひとりぼっちやね。ずーっと一人ぼっちでくるんやけども、そのさびしさは、いたずらをしてまぎらわしたけども、ここのこの兵十のひとりぼっちでさみしそうなを見た時に、今まで、まぎらしていた自分の一人ぼっちのさみしさも思い出す。

T はい、ほかに、まだ、こんなことも思った、というのを出して、美由紀 兵十といっしょで、ためいきまじりで、おれと同じひとりぼっちの兵十か、て思っている。

T 兵十と同じに。どうしてためいきがでるの？

美由紀 自分の悲しみも思い出す

T 自分の悲しみもここで、いっしょに。おれもさびしい。そうやなくて、自分と同じように思えてくる。

邦臣 おれも、ひとりぼっちでがんばっているから、兵十もがんばれよとはげましていて、くんは、ひとりぼっちの気持ちがわかる。

T ほう、また違うこといいましたね。ひとりぼっちのきもちがわかるから、なんだって？がんばれよって。

今の邦臣君みたいに思った人ある？ (なし)

邦臣くんは、「かわいそうだな。」て気持ちを受け止めてるだけじゃなくて、なんか、がんばれよって、兵十にはげましているような。

朝子 おれと同じひとりぼっちの兵十か、の前に「死んでしまつては」て書いてあるから、なんか、くんには、あまりわからないから、そっちの方がよいかわいそうだなって思える。

T ……もういっぺん、言ってくれる。

朝子 (くりかえし) 初めからひとりぼっちだったくんには、そのさびしさがわからないから、自分よりかわいそうだなあ。

治武 くんは、初めからひとりぼっちやけど、兵十は、今までおっかあ二人つきりで暮らしていて、おっかああ死んだ悲しさが、くんにはよくわからない。

T くんより、もっとかわいそうだなって言うてるのね。

由美子 くんは、最初からひとりぼっちだったけど、兵十は、お母さんとの思いでがいっぱいあるから、よけいにかわいそう。

有香 くんははじめから一人ぼっちだったけど、兵十は今、おっかあが死んだばかりだから、よけいにかわいそう。

T わかるね。ここまでは、毎日、さびしかったけれど、おっかあと二人で、話をして、「今日、こんなおもしろいことあったんよ。」とか言ってたのに、そのたった一人おっかあがなくなった悲しさは、もうずっと一人ぼっちでやってきて、一人ぼっちになれているごんから見たら、自分よりもっとかわいそうだなて見えてくる。

朝子、そういうことですか？（朝子うなづく）

まだ、もっとこんなこと考えた、という人ありますか？

なつ希 ごんは、なんか、兵十といっしょで、ひとりぼっちの友達気分  
T ……また違う意見が出てきた。今のわかった？もういっぺん言ってくれる？

なつ希（くりかえす）

T なんか、この時、兵十が友達のように見えてきた。

そんなこと、思った人ある？（ある！）はい、大裕

大裕 けんかしてた相手やで。

C うん？

T ほど、大裕は、ずっと前から友達やっと思ってる？なつ希はどうなの？今、この時に友達と思えてきた、どっち？

なつ希……

T 智将は、どういう意見なの。

智将 前やったら兵十は二人ぐらしだって、ごんとは、家族の人数がちがうけど、もうひとりぼっちになって、ごんとひとりぼっちどうしの友達。

T ほう、すごいこといいかけてるね。どう、みんな。おんなじひとりぼっちで、なんか友達のように見えてきた。……どうでしょう。今、言うてやることわかるかな……

そうつと兵十の姿を見ているの、前にもありましたね。

どこだった？1章にあったね。

直也 歩みよって。

T そう、そこ、ちょっと見てごらん。57ページ。

「兵十だな。」この時、兵十を見ている目と、今、「ひとりぼっちの兵十か。」で見ている。この時のごん。兵十を見る目は、同じでしょうか、ちがうでしょうか。

C ……ちがう。

直也 しらんとつたで。

明代 1章に書いてあるときは、ごんが見ているのは、なんかいたずらをしたくなつて見ていたんだけど、次の「おれと……」と言いなから見ているときは、……。

T だれか、言えない？

いたずらしようと思つて見ているときと、今。どうでしょうか。

同じじゃないみたけど、どちらがうかな。

優子 いたずらをするときのごんは、兵十のおっかあが死ぬてしらんかったけども、後から、ごんが、兵十の家へいって、見ている時は、友達のように思えたから、今の方が親しくなっている。

T 最初の時は、ただのいたずら相手だけど、今見ているときは、なんか同じ一人ぼっちの友達のように見える。  
そういうことを言ってるのね。智将は。

……そこまでは、まだ思えない？さおりはどう。ここでごんが友達みたいに思っているなんて思えない？

紗織 思う。

T あ、思う。私もそんな気がする。衣利子はどう？

衣利子 ……

智将 さびしい兵十を見ていなかったら、自分の悲しみがこみあげてきていないし、まだその時は、友達とは思っていなかったと思う。

T 何、友達とは思えない？

智将 見てなかったらそのまま、いたずら相手というかんじで、さびしさもこみあげてきていなかったから、友達とは思っていない。

T もしも、こんなときごとがなかったら、ごんと兵十は、ただのいたずら相手という関係だ。でも、こういう姿を見た時に、自分と兵十が全然関係ない相手じゃなくて、もっと近いような、友達のように見えってきた。

朝子 一番はじめは、いたずらをしたかと思って兵十を見ていたけれどこの時は、麦をといでいるのを見て、なんか、兵十がかわいそうでならなかったから、いつもよりもずうっと、葬式の時みたいにおれたままになっていたから、ごんは、ためいきまじりに見ていたと思う。

T うんと心をやっているわけね。  
今まで、そんなふうに関心をやる相手はあったのでしょうかね。（な

い）  
友達と思っているのかどうかはわからないけれども、少なくともごんがそんなふうに関心しているなら、人間といたら、自分のうさはらしの相手だったのが、この時は自分の思いをかける相手になっているわけね。

はい、このへんで、ごんの気持ちをもういっぺん書いてください。

C 作業

このあとは、読みながら、それぞれの書き込みを出し合う

ごんは、物置のそばをはなれて、むこうへいきかけますと

由美子 うなぎのつぐないに何かできないだろうかと考えながら直也 さびそうにとほとほと

衣利子 ごんはこれ以上見ていたら兵十に見つかると、本当はうなぎのいたずらをやったことをあやまりたい気持ち。

いわしを売る声がします

朝子 今はずっと何か思った。  
哲也 びっくりした。

いせいのいい声のする方へ走っていききました。

紗織 兵十にいたずらをしていたら、ごんは、兵十の家にいわしをもつていってやるう、そしたら、兵十は、うれしがらうと思つて、いせいのいい声のする方へ走つていった。

和樹 もう、穴へ帰ろうと思つているときに、いきなりいわしが来たから、「グッドタイミング」と思つて、走つていった。

美由紀 いきいいわしだなあ、と思って、そうだ、いいことかんがえたぞって。

T ここで、何かしようと思った。

宏 兵十に何かしようと考えていたらいわしやが来たから、いわしを兵十にやろうと思った。

哲也 何だろう、何かなと思って走っていった。

T あっ、ちがうのが出たよ。この時は、何だろうなと思って

この時は、まだ、いわしをどうしよう、とは思っていなかったんだという人ある？いや、もうここでひらめいたんだ、と言う人（多数）

じゃ、もう少し読んで、ごんが、よしこれだ、と本当に思ったのはいつか考えてみましょう。

ぴかぴか光るいわし

勝仁めちやくちやきれいないわしだった。

哲也 新しいいわし。

宣彦 今とってきたばかりだから、いわしのむねがぴかぴか光っているCとれたて、いうことやね。そんなのをみたときに、

衣利子 ごんは、このいわしだったら兵十によるこんでもらえると思って、この元気のいいいわしを見ていると、なんか、ごんまで食べたくなってくる。

朝子 このぴかぴか光るいわしをもっていつてあげたら、兵十の心もすつきりするし、あんな暗い顔にならないだろう。

優子 いわしがぴかぴか光るように兵十の心も光るといいなあと思っている。

T ええといわったね。兵十の心もこんなふうに光ってくれたらいいな和樹 ひかぴか光ってるから、なんか、うなぎよりごうかに見えるし、

ごんは、よし、これだと、思って、今日はついているなと思ってる。大裕 兵十がな、いきのいいいわしを食べると、兵十も元気になる。

直也 近くで見ると、よけいおいしそうに見える。

T 近くで見るとよけいおいしそうに見える。そうすると、さっきの声を聞いたときは、ひらめいたという人やまだ

考えてないという人もいたけど、このぴかぴか光るのを見たときには何か、これを食べさせたらよろこぶだろうな、とひらめいた。

その続き。

## 五、六びきのいわし

宣彦 一びきだけじゃ何の役にもたたない。

勝仁 二・三びきやったら兵十は喜ばん。

もときた方へかけだしました

和樹 兵十にもはやくきげんをなおしてもらおうと思ってなつ希 うれしくて掛け出している

投げ込んで、あなへ向かってかけもどりました。

宏 ゆっくなげこんでたら、兵十に見つかる

T 何で

直也 ほら、心をしらんし。前いたずらしとくし。

宏 自分は、兵十のこと思っても、兵十は、きつねを

T 気持ちはいっぱいあるんだけど、ね。

直也 おいていったら、兵十にみつかるし、

まず一ついいことをしたと思いました。

C 「まず一つ」だから、まだいっぱいするつもり。

有香 兵十のおつかあが、いわしを食べたいと思って死んでいったことに比べたら、いわしを5、6匹きやることぐらいは、まだまだ。

直也 これでいいと思って明日は、何もついでいこうと思っている。

宏 うなぎのおかえしにしてよかった。

和樹 うなぎより、いわしの方がごうかじゃないから、まだまだするつもり